

若者の「親ガチャ」意識に関する定量的研究 —認知や意味理解、使用状況とその属性差に着目して—

小西凌

三重大学

熊谷信司

株式会社マクロミル

概要: 本研究は、18～22 歳の若者を対象とした WEB モニター調査データを用い、「親ガチャ」の認知、意味理解、アタリハズレ認識、使用・想起頻度の分布状況を基礎的に検討したものである。分析の結果、「親ガチャ」は若者の間で高い認知率を示しており、特に学生層で認知度が高かった。また「親ガチャ」は「生まれた家庭の経済的格差」や「努力より家庭環境によって将来が左右される社会」を表す言葉として理解される割合が高く、不平等や機会格差と結びついた語として受け止められていた。さらに、「ハズレ」認識が強い層ほど、「親ガチャ」を日常的に使用・想起する傾向が強く、自身の家庭環境や生育経験を振り返る場面で用いる割合も高かった。これらの結果は、「親ガチャ」が単なる流行語ではなく、若者が家庭環境や不平等認識を語る際の語彙として一定程度定着している可能性を示している。

キーワード: 親ガチャ, 若者意識, 家庭環境, WEB モニター調査, 定量的研究

A Quantitative Study on Young People's Perceptions of “Oya-Gacha”: Focusing on Awareness, Interpretations, Usage Patterns, and Their Differences by Attributes

Ryo Konishi

Mie University

Shinji Kumagai

Macromill, Inc.

Abstract: This study uses data from an online survey of young people aged 18 to 22 to examine the distribution of awareness, interpretations, win/lose perceptions, and usage/recall frequency of the term “oya-gacha” (a Japanese slang term referring to the perceived lottery of family background). The results showed that recognition of the term was widespread among young people, particularly among students. In addition, many respondents understood “oya-gacha” as a term referring to economic disparities in family background and a society in which future opportunities are shaped more by family environment than by individual effort, indicating that the term is closely associated with perceptions of inequality and unequal opportunities. Furthermore, respondents with stronger “lose” perceptions were more likely to use or recall the term “oya-gacha” in their daily lives, and were also more likely to use it when reflecting on their own family environment and upbringing experiences. These findings suggest that “oya-gacha” is not merely a passing slang expression, but has become an established term through which young people interpret and express their perceptions of family background and social inequality.

Keywords: oya-gacha, youth attitudes, family environment, web-based survey, quantitative study

1. はじめに

近年、「親ガチャ」という語は若年層を中心に急速に広がり、家庭環境や出自による機会格差を象徴する表現として社会的に定着しつつある。この語は、本来はインターネットスラングとして登場したものであるが、現在では新聞報道やテレビ番組でも用いられるようになり、若者の不平等認識を示すキーワードとして扱われている(読売新聞 2022)。とりわけ、「生まれによって人生が左右される」という感覚や、「努力だけでは乗り越えられない格差が存在する」という認識と結びつく語として広く共有されている点が特徴的である(土井 2021)。

これまでの研究は、新聞記事や SNS を対象とした言説分析を通じて、「親ガチャ」という語がどのような文脈で用いられ、いかなる社会的意味を付与されてきたのかを明らかにしてきた(小西 2023、2026)。しかし、そうした研究は主としてメディア上の表象を対象としており、当事者世代である若者自身がこの語をどの程度認知し、どのように受け止めているのかについては、十分な量的検証がなされていない。とりわけ、全国規模のデータを用いて若者の認知・使用実態や主観的評価を検討した研究は限定的である。

「親ガチャ」という言葉は、出自や家庭環境を本人の努力では選択できないものとして捉える感覚を含んでいる(ヒオカ 2021)。そのため、この語をどのような若者が認知し、どのように自己の経験や将来認識と結びつけているのかを検討することは、若者の不平等認識のあり方を把握するうえで重要である。

従来の教育社会学や社会階層研究では、親学歴、世帯収入、文化資本、家庭環境などが、子どもの教育達成や進路形成に影響を及ぼすことが繰り返し指摘されてきた(荻谷 2000、橋本 2010)。しかし、これらの研究の多くは、家庭背景を客観的な階層要因として捉えることに重点を置いており、若者自身が自らの家庭環境をどのように評価し、それをどのような言葉で理解しているのかについては、検討されてきたとは言い難い。特に、「親ガチャ」という語が若者の間でどの程度共有され、どのような層で用いられているのかについては、基礎的実態そのものが十分に明らかになっていない。

本研究は、18～22 歳の若者を対象とした WEB モニター調査データを用い、「親ガチャ」の認知、意味理解、アタリハズレ認識、使用・想起頻度の分布状況を基礎的に検討することを目的とする。18～22 歳という年代は、高校卒業後の進学や就職を経て、大学在学期から就労初期に至る成人期への移行過程に位置づけられる。日本では、この時期は学校から職業への移行や経済的自立、親からの心理的・社会的自立を経験する重要なライフステージとされており(Arnett 2000、小杉 2002、宮本 2006)、家庭環境や親との関係を他者との比較を通じて捉え直す契機が生じやすい(Arnett 2014)。

本稿では、性別、学生／学生以外といった属性差に着目しながら「親ガチャ」意識がどの程度共有され、どのような意味理解や使用実態と結びついているのかを探索的に明らかにする。これにより「親ガチャ」という語が、若者の間でどのように認知・使用され、自身の家庭環境や不平等認識とどのように結びついているのかを示す基礎的データを提示する。

2. 調査の対象・内容

2.1 調査対象

本調査は、18～22歳の男女を対象とするオンライン質問紙調査として実施した。回答者には「学生」と「学生以外」の双方を含めることで、青年期における立場や生活状況の差異を確認できる設計とした。

本調査の質問項目は、「親ガチャ」に関する認知・使用経験・解釈といった基本的項目に加え、家庭環境の主観的評価に関連する意識・経験を把握する項目から構成される。

表1 主要設問群の一覧（設問／主な内容／回答形式）

設問	主な内容	回答形式
Q1 きょうだい構成	ひとりっ子／長子／中間子／末子	単一選択
Q2 家庭構成	小学生・中学生・16～18歳時点で同居していた家族（父母、再婚親、兄弟姉妹、祖父母、一人暮らし等）	複数選択
Q3 親学歴・本人学歴	父親・母親・本人の最終学歴	単一選択
Q4 親子関係	父親・母親との現在の関係性	単一選択
Q5 主観的家庭環境	家計の豊かさ／親学歴／学習環境／習い事機会／文化経験／人脈／住環境	5件法
Q6 家庭環境の比較対象	同級生／学校外の友人／アルバイト先の人／親戚／SNS上の同世代等	複数選択・単一選択
Q7 格差認識経験	進路選択／習い事・留学経験／親の関わり方／生活水準／旅行・文化経験／友人家庭／SNS閲覧等	複数選択・単一選択
Q8 「親ガチャ」言葉認知	「よく知っている」「だいたい知っている」「聞いたことはある」「全く知らない」	4件法
Q9 「親ガチャ」当たり外れ認識	「とても当たり」「まあ当たり」「どちらともいえない」「まあハズレ」「とてもハズレ」「判断したくない」	6件法
Q10 「親ガチャ」使用・想起頻度	「よく使う／思う」「たまに使う／思う」「ほとんど使わない／思わない」「全く使わない／思わない」	4件法
Q11 「親ガチャ」使用・想起場面	自分や他人の家庭について話すとき／世の中の話題／SNS投稿・返信／自分の環境や能力を考えると等	複数選択
Q12 「親ガチャ」の意味理解	経済格差／教育格差／親の価値観／人脈差／愛情差／社会的不平等／努力では変えられない社会等	複数選択
Q13 親からの支援・関わり	進路断念経験／進学費用支援／進路相談／塾・習い事断念／文化経験／親への相談／心理的支え等	5件法
Q14 親からの影響・期待	選択尊重／親の期待／教育観プレッシャー／進路への関心／叱責経験／親の影響認識／将来への影響等	5件法
Q15 自己将来見通し	「とても前向き」「やや前向き」「どちらともいえない」「あまり前向きでない」「まったく前向きでない」	5件法

2.2 サンプリングと対象者の特性

2.2.1 調査対象数の決定

本調査では、「親ガチャ」の認知、意味理解、アタリハズレ認識¹、使用・想起頻度について属性差に着目した基礎的記述分析を行うことを目的とし、比較可能なサンプル規模を確保する方針をとった。回答者の属性としては、「学生」²800名と「学生以外」800名を設定し、18～22歳の各年齢層に均等に割り当て、各年齢層160名ずつとした。各年齢層においては男女比が均等となるよう、男女それぞれ80名ずつを割り当てた。このように、年齢別および属性別の回収数を均等に確保することを目的とし、最終的な目標サンプルサイズを1,600名と設定した。

2.2.2 調査の実施概要

¹ 本研究では、「親ガチャ」の「アタリ」「ハズレ」を客観的な家庭条件として定義するのではなく、若者による主観的な評価として捉え、その認識の分布を把握するとともに、属性や家庭環境との関連を検討する。

² 本調査では、学生について学校種を把握している。学生の内訳は、大学学部641名、専門学校・短期大学101名、大学院46名、高校22名、高等専門学校8名、浪人生9名、その他3名であった。しかし、本研究では18～22歳の若者を「学生」と「学生以外」に区分し、学校教育の場に在籍しているか否かという社会的地位の違いに着目して分析を行った。成人期への移行研究では、学生であること自体が発達的・社会的文脈を規定する重要な属性であることが指摘されており（Crocetti et al. 2015）、本研究においても学校種間の差異ではなく、学生と非学生という立場の違いを重視した。そのため、学校種は分析には用いなかった。学校種による差異については、今後の課題としたい。

調査は、調査会社（株式会社マクロミル）に登録されたモニターを対象として実施した。調査会社の配信システムを通じて対象条件に合致するモニターに調査案内を提示し、対象者には親子関係や子どもの頃の家庭環境に関する質問内容が含まれる調査であることを冒頭で説明し、同意を得られた対象者から回答を得た。調査期間は2026年4月10日～4月15日である。回答は無記名で収集し、個人が特定される情報は取得していない。なお、回答者には調査会社の規定に基づき謝礼が付与された。

2.2.3 回収サンプルの構成と偏り

最終的な有効回答数は1,660人である。回収サンプルの年齢構成は18歳が217人、19歳が296人、20歳が316人、21歳が389人、22歳が442人であった。本人学歴は、学生830人、学生以外830人であり、性別構成は男性685人、女性975人である³。

2.2.4 サンプルの評価とバイアスの可能性

以上より、本調査は、WEB調査会社に登録されたモニターを対象として、年齢・性別・学生／学生以外といった属性ごとに回収数を割り当てた割当抽出型のオンライン調査として位置づけられる。そのため、得られた分布は若者全体の厳密な推定値ではなく、登録モニター若者層における傾向として解釈される。特に、本調査が対象とする「親ガチャ」意識は、インターネット上で流通・拡散してきた言説と密接に結びついている概念である。そのため、オンライン調査によって把握される認知や使用実態は、インターネット上の言説環境に強く依存したものとなる可能性がある。

すなわち、本調査の結果は、「親ガチャ」という言葉やその意味に日常的に接触している層の傾向を相対的に過大に反映している可能性があり、この点は解釈上の重要な制約となる。ただし、こうした制約があるとしても、大規模サンプルに基づいて「親ガチャ」意識の分布と年齢差を基礎的に可視化することは、今後の理論的検討や他データによる追試・比較の基盤となる点で意義がある。

3. 結果

3.1 「親ガチャ」と属性差の検討

3.1.1 「親ガチャ」言葉認知の特徴

まず、「親ガチャ」という言葉の認知状況について性別差を確認した。表2によれば、「親ガチャ」の言葉認知については、カイ二乗検定の結果、男女間で統計的に有意な関連が確認された（ χ^2 検定、 $p < .01$ ）。ただし、「よく知っている」と回答した割合が男性45.5%に対して女性52.9%であり、調整済み残差を確認すると女性のほうが高かった一方で、「だいたい知っている」まで含めた割合を見ると、男性84.8%、女性84.4%となり、大きな差は確認されなかった。すなわち、女性は「十分に知っている」と回答する割合がやや高いものの、概括的な認知水準そのものには大きな男女差はみられない。

³ 回収サンプルでは女性回答者の割合が男性より高い。したがって、本研究で示す記述統計は当該サンプルに基づくものであり、18～22歳人口全体の性別構成を反映したものではない点には留意が必要である。この点を踏まえ、性別ごとの回答傾向についても併せて検討する。

次に、学生／学生以外別に見ると、学生のほうが認知・理解状況は高かった。具体的には、「よく知っている」は学生 52.8%、学生以外 47.0%であり、「よく知っている」+「だいたい知っている」の合計でも、学生 89.8%に対して学生以外 79.4%と約 10 ポイントの差が確認された。反対に、「全く知らない」は学生 3.0%に対し学生以外 9.2%であり、学生以外で認知度が相対的に低い傾向が見られた。全体として、統計的にも有意差が確認された (χ^2 検定、 $p<.001$)。

表 2 性別・学生／学生以外別にみた「親ガチャ」言葉認知

			「親ガチャ」言葉認知			
n			よく知っている	だいたい 知っている	聞いたことは ある	全く知らない
性別	男性	(685)	45.5%	39.3%	9.3%	5.8%
			調整済み残差	-3.0	3.3	0.0
	女性	(975)	52.9%	31.5%	9.3%	6.3%
			調整済み残差	3.0	-3.3	0.0
全体		(1,660)	49.9%	34.7%	9.3%	6.1%
p =.009						
			「親ガチャ」言葉認知			
n			よく知っている	だいたい 知っている	聞いたことは ある	全く知らない
学生／ 学生以外別	学生	(830)	52.8%	37.0%	7.2%	3.0%
			調整済み残差	2.4	2.0	-3.0
	学生以外	(830)	47.0%	32.4%	11.4%	9.2%
			調整済み残差	-2.4	-2.0	3.0
全体		(1,660)	49.9%	34.7%	9.3%	6.1%
p =.000						

3.1.2 「親ガチャ」意味理解の特徴

次に、「親ガチャ」という言葉がどのような意味として理解されているのかについて、性別および学生／学生以外別に検討した(表 3)。全体として最も多かったのは、「生まれた家庭の経済的な格差を表す言葉」(43.3%)であり、次いで「本人の努力などより、生まれた家庭で将来が決まってしまう社会を表す言葉」(32.3%)、「ネット上で使われるスラング・ネタ的な言葉」(31.3%)、「親の価値観や子育ての仕方の違いを表す言葉」(30.9%)が続いた。これらの結果から、「親ガチャ」は単なる流行語ではなく、家庭環境や格差、不平等と結びついた言葉として理解されていることがわかる。

性別差に着目すると、男性は「親の学歴や教育環境の違い」や「社会全体の不平等」を選択する割合が相対的に高かった。一方で、女性は「家庭における愛情や安心感の差」を選択する割合が高く、家庭内の情緒的側面と結びつけて理解する傾向がみられた。また、学生／学生以外別にみると、学生は「生まれた家庭の経済的な格差」や「努力より家庭環境で将来が決まる社会」を選択する割合が高かった。一方で、学生以外では「わからない／考えたことがない」が高く、学生層のほうが「親ガチャ」を格差や不平等の問題として理解している傾向がうかがえる。

表3 性別・学生／学生以外別にみた「親ガチャ」意味理解（複数回答）

(%)

		n	生まれた 家庭の経 済的な格 差を表す 言葉	親の学歴 や教育環 境の違い を表す言 葉	親の価値 観や子育 ての仕方 の違いを 表す言葉	親の人間 関係や人 脈の差を 表す言葉	家庭にお ける愛情 や安心感 の差を表 す言葉	社会全体 の不平等 を象徴す る言葉	本人の努 力などよ り、生まれ た家庭で 将来が決 まってしまう社会を表 す言葉	ネット上で 使われる スラング・ ネタ的な 言葉	その他	わからない ／考えた ことがない
性別	男性	(645)	42.6	23.7	29.8	18.6	23.7	24.5	33.3	31.0	0.8	11.3
	女性	(914)	43.8	17.7	31.7	15.6	30.3	20.4	31.5	31.5	1.0	14.9
学生／	学生	(805)	45.0	21.1	30.6	16.5	26.0	23.9	34.4	32.3	0.6	9.4
学生以外	学生以外	(754)	41.5	19.2	31.3	17.2	29.3	20.2	30.0	30.2	1.2	17.6
	全体	(1,559)	43.3	20.2	30.9	16.9	27.6	22.1	32.3	31.3	0.9	13.4

3.1.3 「親ガチャ」アタリハズレ認識の特徴

続いて、「親ガチャ」という言葉の認知者（先の認知質問で「よく知っている」「だいたい知っている」「聞いたことはある」と回答した者）を対象に、自身の「親ガチャ」をどのように評価しているかを確認した（表4）。なお、「判断したくない」と回答した者は分析から除外した。

性別との関連については、カイ二乗検定の結果、統計的に有意な関連が確認された（ χ^2 検定、 $p<.01$ ）。ただし、連関係数（Cramer's $V=.112$ ）は大きくなく、性別による差異は限定的であった。具体的には、「とてもアタリと感じる」は男性 29.5%、女性 28.1%であり、大きな差はみられなかったものの、「まあアタリと感じる」まで含めると、男性 66.0%、女性 61.0%となり、男性のほうがやや高かった。一方で、「まあハズレと感じる」は女性 12.9%、男性 7.2%であり、女性のほうが高い傾向がみられた。

また、学生／学生以外別に見ると、学生のほうが「アタリ」認識を持つ割合が高かった。「とてもアタリ」+「まあアタリ」の合計は、学生 69.4%に対し学生以外 56.0%であり、学生のほうが 13 ポイント以上高かった。反対に、「まあハズレ」+「とてもハズレ」の割合は、学生 10.3%に対し学生以外 20.6%となり、学生以外で「ハズレ」認識が高い傾向が確認された。全体として、統計的にも有意差が確認された（ χ^2 検定、 $p<.001$ ）。

表4 性別・学生／学生以外別にみた「親ガチャ」アタリハズレ認識

「親ガチャ」アタリハズレ認識								
n			とてもアタリと 感じる	まあアタリと 感じる	どちらとも いえない	まあハズレと 感じる	とてもハズレと 感じる	
性別	男性	(553)	29.5%	36.5%	20.6%	7.2%	6.1%	
			調整済み残差	0.5	1.4	-0.9	-3.3	2.2
	女性	(761)	28.1%	32.9%	22.6%	12.9%	3.5%	
			調整済み残差	-0.5	-1.4	0.9	3.3	-2.2
	全体	(1,314)	28.7%	34.4%	21.8%	10.5%	4.6%	
p=.002								
「親ガチャ」アタリハズレ認識								
n			とてもアタリと 感じる	まあアタリと 感じる	どちらとも いえない	まあハズレと 感じる	とてもハズレと 感じる	
学生／ 学生以外別	学生	(699)	30.9%	38.5%	20.3%	6.4%	3.9%	
			調整済み残差	1.9	3.3	-1.4	-5.1	-1.4
	学生以外	(615)	26.2%	29.8%	23.4%	15.1%	5.5%	
			調整済み残差	-1.9	-3.3	1.4	5.1	1.4
	全体	(1,314)	28.7%	34.4%	21.8%	10.5%	4.6%	
p=.000								

3.1.4 「親ガチャ」使用・想起頻度の特徴

次に、「親ガチャ」という言葉の認知者（先の認知質問で「よく知っている」「だいたい知っている」「聞いたことはある」と回答した者）を対象に、「親ガチャ」という言葉を日常的に使ったり思い浮かべたりする頻度について確認した（表5）。

性別に見ると、男女ともに「全く使わない／思わない」が最も多く、男性 47.4%、女性 54.9%であった。全体としては、「親ガチャ」という語を積極的に使用する層は限定的であることが分かる。一方で、「よく使う／思う」＋「たまに使う／思う」の割合を見ると、男性 24.3%に対して女性 16.8%であり、男性のほうがやや高かった。全体として、統計的にも有意差が確認された（ χ^2 検定、 $p<.01$ ）。

他方、学生／学生以外別では大きな差は確認されなかった。「よく使う／思う」＋「たまに使う／思う」の割合は、学生 20.5%、学生以外 19.3%であり、ほぼ同水準であった。カイ二乗検定の結果も有意ではなく、学生か否かによる「親ガチャ」使用頻度の差は限定的であると考えられる。

表5 性別・学生／学生以外別にみた「親ガチャ」使用・想起頻度

			「親ガチャ」使用・思考			
n			よく使う/思う	たまに 使う/思う	ほとんど 使わない/ 思わない	全く使わない/ 思わない
性別	男性	(645)	5.1%	19.2%	28.2%	47.4%
		調整済み残差	2.2	2.9	-0.1	-2.9
	女性	(814)	3.0%	13.8%	28.3%	54.9%
		調整済み残差	-2.2	-2.9	0.1	2.9
全体		(1,559)	3.8%	16.0%	28.3%	51.8%
p=.001						
			「親ガチャ」使用・思考			
n			よく使う/思う	たまに 使う/思う	ほとんど 使わない/ 思わない	全く使わない/ 思わない
学生／ 学生以外別	学生	(805)	3.7%	16.8%	30.1%	49.4%
		調整済み残差	-0.3	0.8	1.6	-1.9
	学生以外	(754)	4.0%	15.3%	26.4%	54.4%
		調整済み残差	0.3	-0.8	-1.6	1.9
全体		(1,559)	3.8%	16.0%	28.3%	51.8%
p=.230						

3.1.5 「親ガチャ」使用・想起の具体場面の特徴

次に、「親ガチャ」という言葉をどのような場面で用いる、あるいは想起するのかについて検討した（表6）。全体として最も多かったのは、「自分自身の家庭や育ちについて話すとき」（41.5%）であり、次いで「自分の育った環境について考えるとき」（35.8%）、「友人・知人の家庭や育ちについて話すとき」（30.9%）が続いた。このことから、「親ガチャ」は単なるネット上の表現というよりも、自身や他者の家庭環境を振り返る際に用いられる傾向があることがわかる。

性別差に着目すると、男性は「友人・知人の家庭や育ちについて話すとき」（男性 37.2%、女性 25.7%）や「世の中の状況に関する話題をするとき」（男性 28.0%、女性 19.4%）が高く、他者比較や社会状況と関連づけて用いる傾向がみられた。一方で、女性は「自分

の育った環境について考えるとき」(男性 32.4%、女性 38.6%)が高く、より内省的な文脈で想起する傾向がうかがえる。

また、学生／学生以外別にみると、学生は「世の中の状況に関する話題をするとき」(27.3%)や「友人・知人の家庭や育ちについて話すとき」(33.4%)が比較的高かった。一方で、学生以外では「自分の育った環境について考えるとき」(38.7%)や「他の人の家庭の話や教育の話などを見聞きしたとき」(24.7%)が高く、日常経験や人生の振り返りと結びつけて想起する傾向がみられた。

表 6 性別・学生／学生以外別にみた「親ガチャ」使用・想起の具体場面（複数回答）

											(%)
		n	自分自身の 家庭や育ち について話 すとき	友人・知人 の家庭や育 ちについて 話すとき	(特定の人の 話ではな く)世の中 の状況に関 する話題をす るとき	自分の意見 や経験を投稿 するとき	他人の投稿 や記事に返 信やコメント をするとき	自分の育つ た環境につ いて考える とき	自分の現在 の能力や状 況について 考えるとき	他の人の家 庭の話や教 育の話など を見聞きし たとき	その他
性別	男性	(339)	43.7	37.2	28.0	15.0	12.7	32.4	18.3	21.2	1.5
	女性	(412)	39.8	25.7	19.4	8.0	13.6	38.6	20.1	24.5	2.4
学生／	学生	(407)	42.8	33.4	27.3	10.3	10.3	33.4	17.4	21.6	0.7
学生以外	学生以外	(344)	40.1	27.9	18.6	12.2	16.6	38.7	21.5	24.7	3.5
	全体	(751)	41.5	30.9	23.3	11.2	13.2	35.8	19.3	23.0	2.0

3.2 「親ガチャ」アタリ／ハズレ認識と使用・想起頻度の関連

3.2.1 「親ガチャ」認識と使用・想起頻度の関連（性別統制済み）

前節までの分析では、「親ガチャ」の認知やアタリハズレ認識、使用頻度には性別による差異が確認された。そのため、ここでは性別を統制した上で、「親ガチャ」のアタリハズレ認識と、「親ガチャ」という言葉を日常的に使ったり思い浮かべたりする頻度との関連を確認した（表 7）。

まず男性についてみると、統計的に有意差が確認された（ χ^2 検定, $p < .001$ ）。「とてもアタリと感じる」層では、「全く使わない／思わない」が 51.5%である一方、「よく使う／思う」も 11.0%みられた。他方、「とてもハズレと感じる」層では、「たまに使う／思う」が 55.9%に達し、「全く使わない／思わない」は 14.7%まで低下していた。すなわち、男性では「ハズレ認識」が強まるほど、「親ガチャ」という語を何らかの形で使用・想起する傾向が高まることが確認できる。また、回答者数が少ないため慎重な解釈が必要であるものの、「とてもアタリ」と「とてもハズレ」の両極において、「親ガチャ」という語への接続が比較的強い点も特徴的である。

女性についても同様に、統計的に有意差が確認された（ χ^2 検定, $p < .001$ ）。「とてもアタリと感じる」層では、「全く使わない／思わない」が 72.9%と極めて高く、「よく使う／思う」および「たまに使う／思う」はいずれも 4.2%にとどまった。一方、「とてもハズレと感じる」層では、「よく使う／思う」14.8%、「たまに使う／思う」33.3%となり、「全く使わない／思わない」は 29.6%まで低下していた。女性においても、「ハズレ認識」が強まるほど、「親ガチャ」という語に自身の状況を結びつける傾向が高まっていることが確認できる。

以上より、男女ともに、「親ガチャ」を「ハズレ」と認識するほど、「親ガチャ」という

語を使用・想起する傾向が強まることが示された。特に「とてもハズレ」と回答した層では、「全く使わない／思わない」が大きく低下しており、自身の経験や境遇を説明する言葉として「親ガチャ」が一定程度用いられている可能性が示唆される。

表7 「親ガチャ」認識と使用・想起頻度の関連（性別統制済み）

		「親ガチャ」使用・思考				
「親ガチャ」 アタリハズレ認識		n	よく使う/思う	たまに 使う/思う	ほとんど 使わない/ 思わない	全く使わない/ 思わない
男性	とてもアタリと感じる	(163)	11.0%	9.8%	27.6%	51.5%
			調整済み残差 3.4	-4.3	-1.0	2.9
	まあアタリと感じる	(202)	5.4%	22.3%	29.7%	42.6%
			調整済み残差 -0.3	0.3	-0.3	0.2
	どちらともいえない	(114)	0.0%	25.4%	36.0%	38.6%
			調整済み残差 -3.0	1.1	1.4	-0.9
	まあハズレと感じる	(40)	0.0%	25.0%	40.0%	35.0%
女性			調整済み残差 -1.6	0.6	1.3	-0.9
	とてもハズレと感じる	(34)	8.8%	55.9%	20.6%	14.7%
			調整済み残差 0.8	5.0	-1.3	-3.3
	全体	(553)	5.8%	21.5%	30.6%	42.1%
	$\gamma = -.174, p = .000$					
		「親ガチャ」使用・思考				
「親ガチャ」 アタリハズレ認識		n	よく使う/思う	たまに 使う/思う	ほとんど 使わない/ 思わない	全く使わない/ 思わない
男性	とてもアタリと感じる	(214)	4.2%	4.2%	18.7%	72.9%
			調整済み残差 0.6	-5.4	-4.3	7.7
	まあアタリと感じる	(250)	3.6%	14.8%	33.6%	48.0%
			調整済み残差 0.1	-0.4	1.5	-1.1
	どちらともいえない	(172)	2.3%	23.8%	34.9%	39.0%
			調整済み残差 -1.0	3.4	1.6	-3.5
	まあハズレと感じる	(98)	1.0%	23.5%	39.8%	35.7%
女性			調整済み残差 -1.4	2.3	2.2	-3.2
	とてもハズレと感じる	(27)	14.8%	33.3%	22.2%	29.6%
			調整済み残差 3.2	2.6	-0.9	-2.2
	全体	(761)	3.5%	15.6%	30.1%	50.7%
	$\gamma = -.352, p = .000$					

3.2.2 「親ガチャ」認識と使用・想起頻度の関連（学生／学生以外統制済み）

続いて、学生／学生以外別に、「親ガチャ」のアタリハズレ認識と使用・想起頻度との関連を確認した（表8）。

まず学生について見ると、統計的に有意な関連が確認された（ χ^2 検定， $p < .001$ ）。「とてもアタリと感じる」層では、「全く使わない／思わない」が61.1%と高い一方、「よく使う／思う」も6.9%みられた。他方、「とてもハズレと感じる」層では、「たまに使う／思う」が51.9%に達し、「全く使わない／思わない」は18.5%まで低下していた。また、「まあハズレ」層でも、「全く使わない／思わない」は22.2%と相対的に低かった。すなわち、学生層では、「ハズレ」認識が強まるほど、「親ガチャ」という語を自身の経験と結びつける傾向が強まっていることが確認できる。さらに、「とてもアタリ」認識者においても一定程度「親ガチャ」という語を使用・想起している点が特徴的である。

さらに、学生以外についても、有意な関連が確認された（ χ^2 検定， $p < .001$ ）。「とてもアタリと感じる」層では、「全く使わない／思わない」が67.1%であったのに対し、「とて

もハズレと感じる」層では23.5%まで低下していた。また、「どちらともいえない」層と「まあハズレ」層では、「全く使わない／思わない」がそれぞれ38.9%、41.9%と近い値を示しており、学生層ほど明瞭な段階差は見られなかった。ただし、全体としては、「ハズレ」認識が強まるほど、「親ガチャ」という語を使用・想起する割合が高まるという傾向は共通して確認された。

以上より、学生・学生以外の双方において、「親ガチャ」を「ハズレ」と認識する層ほど、「親ガチャ」という語を自身の経験や状況と結びつける傾向が強いことが示された。もっとも、その関連の現れ方には一定の差異も見られ、学生層のほうが「ハズレ」認識と語の使用・想起との対応関係が比較的明瞭であった。もっとも、その関連の現れ方には一定の差異も見られ、関連の強さを示すガンマ係数は学生層で-0.299、学生以外で-0.256であったことから、学生層のほうが「ハズレ」認識と語の使用・想起との対応関係が比較的明瞭であった。

表8 「親ガチャ」認識と使用・想起頻度の関連（学生／学生以外統制済み）

			「親ガチャ」使用・思考				
	「親ガチャ」アタリハズレ認識	n	よく使う/思う	たまに使う/思う	ほとんど使わない/思わない	全く使わない/思わない	
学生	とてもアタリと感じる	(216)	6.9%	5.6%	26.4%	61.1%	
			調整済み残差	2.3	-5.9	-1.9	5.5
	まあアタリと感じる	(269)	4.1%	19.7%	32.7%	43.5%	
			調整済み残差	-0.2	0.6	0.6	-0.9
	どちらともいえない	(142)	0.7%	26.8%	33.8%	38.7%	
			調整済み残差	-2.4	2.8	0.7	-1.9
	まあハズレと感じる	(45)	0.0%	28.9%	48.9%	22.2%	
			調整済み残差	-1.5	1.8	2.6	-3.3
	とてもハズレと感じる	(27)	11.1%	51.9%	18.5%	18.5%	
		調整済み残差	1.8	4.5	-1.5	-2.9	
全体		(699)	4.3%	18.6%	31.5%	45.6%	
$\gamma=-.299, p=.000$							

			「親ガチャ」使用・思考				
	「親ガチャ」アタリハズレ認識	n	よく使う/思う	たまに使う/思う	ほとんど使わない/思わない	全く使わない/思わない	
学生以外	とてもアタリと感じる	(161)	7.5%	8.1%	17.4%	67.1%	
			調整済み残差	1.9	-3.7	-3.8	5.4
	まあアタリと感じる	(183)	4.9%	15.8%	30.6%	48.6%	
			調整済み残差	0.2	-0.7	0.6	0.0
	どちらともいえない	(144)	2.1%	22.2%	36.8%	38.9%	
			調整済み残差	-1.7	1.7	2.4	-2.7
	まあハズレと感じる	(93)	1.1%	21.5%	35.5%	41.9%	
			調整済み残差	-1.8	1.1	1.5	-1.4
	とてもハズレと感じる	(34)	11.8%	41.2%	23.5%	23.5%	
		調整済み残差	2.0	3.7	-0.7	-3.0	
全体		(615)	4.7%	17.6%	28.9%	48.8%	
$\gamma=-.256, p=.000$							

3.3 「親ガチャ」認知・アタリハズレ・使用想起と意味理解・具体場面の関連

3.3.1 「親ガチャ」認知・アタリハズレ・使用想起と意味理解の関連

次に、「親ガチャ」の認知度やアタリハズレ認識、使用・思考頻度によって、その意味理解にどのような差がみられるのかを検討した。

まず、「親ガチャ」認知度別（表9）についてみると、「親ガチャ」という言葉を「よく知

っている」層では、「生まれた家庭の経済的な格差を表す言葉」(51.1%)や「本人の努力などより、生まれた家庭で将来が決まってしまう社会を表す言葉」(36.7%)を選択する割合が高かった。一方で、「聞いたことはある」層では、「わからない／考えたことがない」が47.7%に達しており、認知水準によって意味理解に大きな差がみられた。

また、「親ガチャ」アタリハズレ認識別(表10)にみると、「とてもハズレと感じる」層では、「本人の努力などより、生まれた家庭で将来が決まってしまう社会を表す言葉」(45.9%)が特に高く、「親ガチャ」を構造的な不平等や機会格差と結びつけて理解する傾向が強かった。一方で、「とてもアタリと感じる」層では、「ネット上で使われるスラング・ネタ的な言葉」(38.2%)が比較的高く、より軽い表現として捉える傾向がみられた。

さらに、使用・思考頻度別(表11)にみると、「親ガチャ」を「よく使う／思う」層では、「本人の努力などより、生まれた家庭で将来が決まってしまう社会を表す言葉」(48.3%)や「社会全体の不平等を象徴する言葉」(35.0%)が高かった。これに対して、「全く使わない／思わない」層では、「わからない／考えたことがない」(17.5%)が相対的に高く、使用頻度の高い層ほど、「親ガチャ」を格差や不平等と関連づけて理解している傾向が確認された。

表9 「親ガチャ」認知度別にみた「親ガチャ」の意味理解(複数回答)

		(%)									
		n	生まれた家庭の経済的な格差を表す言葉	親の学歴や教育環境の違いを表す言葉	親の価値観や子育ての仕方の違いを表す言葉	親の人間関係や人脈の差を表す言葉	家庭における愛情や安心感の差を表す言葉	社会全体の不平等を象徴する言葉	本人の努力などより、生まれた家庭で将来が決まってしまう社会を表す言葉	ネット上で使われるスラング・ネタ的な言葉	わからない／考えたことがない
「親ガチャ」言葉認知	よく知っている	(828)	51.1	24.6	34.8	17.5	33.1	27.2	36.7	36.0	5.9
	だいたい知っている	(576)	38.4	17.9	30.0	18.2	24.0	18.9	30.4	30.7	14.9
	聞いたことはある	(155)	20.0	5.2	13.5	8.4	11.6	6.5	15.5	8.4	47.7
	全体	(1559)	43.3	20.2	30.9	16.9	27.6	22.1	32.3	31.3	13.4

表10 「親ガチャ」アタリハズレ認識別にみた「親ガチャ」の意味理解(複数回答)

		(%)									
		n	生まれた家庭の経済的な格差を表す言葉	親の学歴や教育環境の違いを表す言葉	親の価値観や子育ての仕方の違いを表す言葉	親の人間関係や人脈の差を表す言葉	家庭における愛情や安心感の差を表す言葉	社会全体の不平等を象徴する言葉	本人の努力などより、生まれた家庭で将来が決まってしまう社会を表す言葉	ネット上で使われるスラング・ネタ的な言葉	わからない／考えたことがない
「親ガチャ」アタリハズレ認識別	とてもアタリと感じる	(377)	38.2	18.0	31.0	16.7	30.0	20.4	30.2	38.2	9.5
	まあアタリと感じる	(452)	48.2	21.9	37.2	17.5	28.1	23.9	33.2	33.0	6.0
	どちらともいえない	(286)	41.6	22.4	27.6	17.1	27.3	21.3	33.9	23.1	18.5
	まあハズレと感じる	(138)	47.1	22.5	32.6	13.8	34.1	24.6	34.1	24.6	8.0
	とてもハズレと感じる	(61)	47.5	26.2	18.0	18.0	29.5	24.6	45.9	19.7	11.5
	全体	(1314)	43.8	21.2	32.0	16.8	29.1	22.5	33.2	30.8	10.2

表 11 「親ガチャ」使用・思考頻度別にみた「親ガチャ」の意味理解（複数回答）

												(%)

3.3.2 「親ガチャ」認知・アタリハズレ・使用想起と具体場面の関連

次に、「親ガチャ」の認知度やアタリハズレ認識、使用・思考頻度によって、どのような場面でこの言葉を使用・想起しているのかを検討した。

まず「親ガチャ」認知度別（表 12）にみると、「親ガチャ」を「よく知っている」層では、「自分自身の家庭や育ちについて話すとき」（45.4%）や「自分の育った環境について考えるとき」（39.5%）が高く、家庭環境を振り返る文脈で用いられる傾向がみられた。一方で、「聞いたことはある」層では、全体的に割合が低く、特に「自分の育った環境について考えるとき」は 18.5%にとどまっていた。

また、「親ガチャ」アタリハズレ認識別（表 13）にみると、「とてもハズレと感じる」層では、「自分自身の家庭や育ちについて話すとき」（64.6%）が突出して高く、「自分の現在の能力や状況について考えるとき」（25.0%）も比較的高かった。これに対して、「とてもアタリとを感じる」層では、「世の中の状況に関する話題をするとき」（29.9%）や「他人の投稿や記事に返信やコメントをするとき」（18.2%）が比較的高く、他者や社会に関する話題として用いる傾向がみられた。

さらに、使用・思考頻度別（表 14）にみると、「親ガチャ」を「よく使う/思う」層では、「自分自身の家庭や育ちについて話すとき」（68.3%）や「自分の育った環境について考えるとき」（48.3%）が高かったほか、「他人の投稿や記事に返信やコメントをするとき」（30.0%）も高く、オンライン上での発信や反応とも結びついていた。一方で、「ほとんど使わない/思わない」層では、各項目の割合は全体的に低く、「親ガチャ」を具体的な経験や内省と結びつけて想起する傾向は相対的に弱かった。

表 12 「親ガチャ」認知度別にみた「親ガチャ」使用・想起の具体場面（複数回答）

											(%)
		n	自分自身の 家庭や育ち について話 すとき	友人・知人 の家庭や育 ちについて 話すとき	(特定の人の 話ではなく 世の中の 状況に関す る話題をす るとき	自分の意見 や経験を投 稿するとき	他人の投稿 や記事に返 信やコメント をするとき	自分の育っ た環境につ いて考える とき	自分の現在 の能力や状 況について 考えるとき	他の人の家 庭の話や教 育の話など を見聞きし たとき	その他
「親ガチャ」 言葉認知	よく知っている	(425)	45.4	31.3	26.8	11.8	15.3	39.5	20.9	25.6	1.6
	だいたい知っている	(272)	38.2	33.8	19.1	10.7	11.0	33.5	17.3	18.8	1.8
	聞いたことはある	(54)	27.8	13.0	16.7	9.3	7.4	18.5	16.7	24.1	5.6
	全体	(751)	41.5	30.9	23.3	11.2	13.2	35.8	19.3	23.0	2.0

表 13 「親ガチャ」アタリハズレ認識別にみた「親ガチャ」使用・想起の具体場面（複数回答）

		(%)								
		自分自身の 家庭や育ち について話 すとき	友人・知人 の家庭や育 ちについて 話すとき	(特定の人の 話ではなく 世の中の 状況に関す る話題をす るとき	自分の意見 や経験を投 稿するとき	他人の投稿 や記事に返 信やコメント をするとき	自分の育つ た環境につ いて考える とき	自分の現在 の能力や状 況について 考えるとき	他の人の家 庭の話や教 育の話など を見聞きし たとき	その他
		n								
「親ガチャ」 アタリ ハズレ 認識別	とてもアタリと感じる	(137)	43.8	32.1	29.9	16.1	18.2	35.8	15.3	18.2
	まあアタリと感じる	(246)	37.8	37.4	24.4	8.1	14.2	33.3	17.5	22.0
	どちらともいえない	(175)	37.7	28.0	21.1	12.6	10.3	37.7	21.7	23.4
	まあハズレと感じる	(89)	42.7	21.3	14.6	6.7	10.1	42.7	24.7	24.7
	とてもハズレと感じる	(48)	64.6	29.2	20.8	18.8	10.4	37.5	25.0	25.0
全体		(695)	41.4	31.4	23.2	11.4	13.2	36.4	19.6	22.2

表 14 「親ガチャ」使用・思考頻度別にみた「親ガチャ」使用・想起の具体場面（複数回答）

		(%)								
		自分自身の 家庭や育ち について話 すとき	友人・知人 の家庭や育 ちについて 話すとき	(特定の人の 話ではなく 世の中の 状況に関す る話題をす るとき	自分の意見 や経験を投 稿するとき	他人の投稿 や記事に返 信やコメント をするとき	自分の育つ た環境につ いて考える とき	自分の現在 の能力や状 況について 考えるとき	他の人の家 庭の話や教 育の話など を見聞きし たとき	その他
		n								
「親ガチャ」 使用・思考 頻度別	よく使う/思う	(60)	68.3	41.7	28.3	25.0	30.0	48.3	31.7	23.3
	たまに使う/思う	(250)	49.2	38.4	26.0	15.2	12.4	36.8	20.0	20.0
	ほとんど使わない /思わない	(441)	33.6	25.2	21.1	7.0	11.3	33.6	17.2	24.7
	全体	(751)	41.5	30.9	23.3	11.2	13.2	35.8	19.3	23.0

4. まとめと考察

本研究では、18～22 歳の若者を対象とした WEB モニター調査データを用い、「親ガチャ」意識の分布状況と、その属性差や関連要因について基礎的な記述分析を行った。

第一に、「親ガチャ」という言葉は若者層において高い認知率を示していた。特に学生層では、「よく知っている」「だいたい知っている」を合わせると約 9 割に達しており、青年期世代に広く共有された語となっていることが確認された。一方で、学生以外では認知率が相対的に低く、「全く知らない」割合も高かったことから、「親ガチャ」の浸透には、インターネット接触環境や教育環境の違いが影響している可能性が示唆される。

第二に、「親ガチャ」の意味理解には一定の特徴がみられた。全体としては、「生まれた家庭の経済的な格差」や「努力よりも家庭環境によって将来が左右される社会」を表す言葉として理解される割合が高く、「親ガチャ」が単なるネットスラングではなく、不平等や機会格差を表現する語として受け止められていることが確認された。また、「ハズレ」認識が強い層や、「親ガチャ」を頻繁に使用・想起する層ほど、「社会全体の不平等」や「努力では覆しにくい格差」と結びつけて理解する傾向が強かった。これに対し、「アタリ」認識が強い層では、「ネット上のスラング・ネタ」として理解する割合も比較的高く、同じ「親ガチャ」という語であっても、その受け止め方には差異が存在していた。

第三に、「親ガチャ」のアタリハズレ認識には属性差が確認された。男性や学生層では「アタリ」認識が比較的高く、女性や学生以外では「ハズレ」認識がやや高い傾向がみられた。ただし、性別による連関は大きいものではなく、極端な差異というよりは傾向差として理解すべき結果であった。

第四に、「親ガチャ」のアタリハズレ認識と、語の使用・想起頻度との間には明確な関連がみられた。男女別、学生／学生以外別のいずれにおいても、「ハズレ」認識が強い層は

ど、「親ガチャ」という語を日常的に使ったり思い浮かべたりする割合が高かった。特に、「とてもハズレ」と回答した層では、「全く使わない／思わない」が大きく低下しており、「親ガチャ」が自身の経験や境遇を説明するための主観的カテゴリーとして機能している可能性が示唆される。他方で、「とてもアタリ」と回答した層でも一定程度使用・想起がみられたことから、「親ガチャ」は不遇感のみを表す語ではなく、「恵まれた環境」を相対化・言語化する枠組みとしても用いられている可能性がある。

さらに、「親ガチャ」を使用・想起する具体場面を見ると、「自分自身の家庭や育ちについて話すとき」や「自分の育った環境について考えるとき」が多く、「親ガチャ」が自身の経験や生育環境を振り返る際の語彙として用いられていることが確認された。特に、「ハズレ」認識が強い層や、「よく使う／思う」層では、こうした内省的な場面での使用割合が高く、家庭環境に対する認識と強く結びついていた。一方で、「アタリ」認識が強い層では、「世の中の状況に関する話題」やオンライン上のコメント場面で用いられる割合が比較的高く、他者や社会を語る文脈で使用される傾向もみられた。

以上より、「親ガチャ」は単なる一時的な流行語ではなく、若者が家庭環境や将来可能性、不平等を語る際の語彙として一定程度定着していることが示唆される。特に、本研究は、これまで新聞記事や SNS 分析を中心に論じられてきた「親ガチャ」について、当事者世代を対象とした量的データから、認知・意味理解・使用実態を基礎的に把握した点に意義がある。

一方、本研究は記述的分析を中心としており、家庭背景や主観的階層意識、努力観、精神的健康などとの因果的関連までは明らかにできていない。今後は、多変量分析やインタビュー調査を通じて、「親ガチャ」意識がどのような比較経験や準拠集団の中で形成されるのか、また、それが若者の努力観や将来展望にどのような影響を及ぼしているのかを検討する必要がある。

引用・参考文献

- 荻谷剛彦,2000,「学習時間の研究：努力の不平等とメリトクラシー」『教育社会学研究』第 66 巻,pp.213-230. <https://doi.org/10.11151/eds1951.66.213>
- 小西凌,2023,「流行語「親ガチャ」をインターネットコメントはどのように捉えているか——貧困若年女性を取り上げた事例記事に寄せられたコメントの分析——」『東海社会学会年報』第 15 巻, pp.67-80. https://doi.org/10.34469/tokaiss.15.0_67
- 小西凌,2026,「新聞記事にみる「親ガチャ」——計量テキスト分析による検討」『情報文化学会誌』33(1), in Press.
- 小杉礼子, 2002,「学校と職業社会の接続——増加するフリーター経由の移行」『教育社会学研究』第 70 巻, pp.59-74. <https://doi.org/10.11151/eds1951.70.59>
- 橘木俊詔,2010,『日本の教育格差』岩波新書.
- 土井隆義,2021,「親ガチャという不平等」『朝日新聞』2021 年 10 月 14 日「耕論」.
- ヒオカ,2021,「『親ガチャ』論争で気になる上から目線, 真に語るべき貧困再生産の深刻」ダイヤモンド社, [オンライン], <<https://diamond.jp/articles/-/282871>> (参照日: 2024-07-29).
- 宮本みち子,2006,「長期化する移行期のパラダイム——移行的若年労働市場は何を意味するか」『フォーラム現代社会学』第 5 巻, pp.6-15. https://doi.org/10.20791/ksr.5.0_6

読売新聞,2022,『『親ガチャ』は『優しい言葉』か…1万8,232 ツイートを分析して見えた『ネットの気分』』読売新聞オンライン, [オンライン], 〈<https://www.yomiuri.co.jp/national/20220512-OYT1T50112/>〉(参照日:2025-12-01).

Arnett, J.J., 2000, Emerging adulthood: A theory of development from the late teens through the twenties. *American Psychologist*, 55, pp.469--480. <https://doi.org/10.1037/0003-066X.55.5.469>

Arnett, J.J., 2014, *Emerging adulthood: The winding road from the late teens through the twenties*. Oxford University Press.

Crocetti, E., Tagliabue, S., Sugimura, K., Nelson, L. J., Takahashi, A., Niwa, T., Sugiura, Y., & Jinno, M., 2015, Perceptions of emerging adulthood: A study with Italian and Japanese university students and young workers. *Emerging Adulthood*, 3(4), 242--258. <https://doi.org/10.1177/2167696815569848>

謝辞 本研究は JSPS 科研費 (JP25K23163) の助成を受けました。